

連載 患者目線の医療安全 3

カルテ開示で安全と信頼が高まった実践例



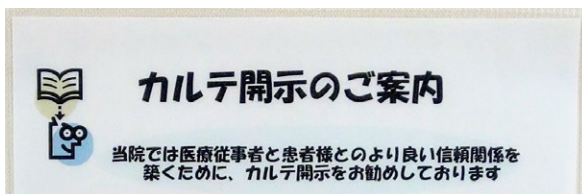
患者の視点で医療安全を考える連絡協議会 世話人 勝村 久司

カルテ開示を「勧める」病院

2010年10月6日に放送されたNHKの「福祉ネットワーク」というTV番組で、京都民医連中央病院のカルテ開示の取り組みが紹介されました。

まず、待合室や廊下に貼られている「カルテ開示のご案内」というポスターの冒頭に、以下のような記載があることが紹介されます。

「当院では医療従事者と患者様とのより良い信頼関係を築くためにカルテ開示を求められる事をお勧めしております。」



京都民医連中央病院で現在掲示されているポスターより

この「お勧めしております」という言葉は、カルテ開示に対するハードルをなくすだけでなく、医療者側から「共に情報共有して、一緒に医療をすすめていきましょう」と言ってくれているわけで、本当に素晴らしい病院の姿勢だと思います。

毎日、電子カルテを印刷して渡す小児科

続いて、同番組では、京都民医連中央病院の小児科で、毎日、入院患者全員の電子カルテを印刷して、患者家族一人ひとりに渡していることが紹介されました。

仕事を終えて夕方の時間帯にやってくる保護者からは、「その日の治療の内容がわかる」とか、「看護記録を見て子どもの一日の様子がわかる」などの非常に好評な意見が届いているとのことでした。

さらに、「渡すことによって、医療者側やスタッフがきっちりと内容を書くことになり、きっちりと書かれたカルテを見て、保護者が聞いていたことや医療者側が思いこんでいたことと事

実が異なるような場合に、保護者から教えてもらうことができ、医療の質の向上にも役立っています」と小児科部長は話しています。

カルテ開示には多くのメリットがある

また、「実は、2人の患者に異なる薬を互い違いに投与してしまうようなミスがありました。そのときも、そのことをカルテに書きますから、同時に謝罪にもうかがうことになります」という小児科部長の話も紹介し、続いて番組のナレーションが「カルテは、すべてを正確に書くことが原則です。たとえ間違いがあった場合も、その事実を患者に伝え、患者と向き合うことにカルテ開示はつながっています」と語ります。

患者側から見れば、たとえミスがあったとしても、このような取り組みがあれば「正直に全部話してくれている」という信頼につながり、精一杯医療をおこなってくれている証となるでしょう。そのことで、たとえ結果が悪くなくても、患者として受け入れていくことができると思います。

実は、この病院の小児科の取り組みは、15年以上前の2003年から始まっており、昨年10月24日の読売新聞でも取り上げられました。

1歳の長男の高熱が下がらず受診したら「川崎病」と診断され、母親は説明を聞くだけではとても不安だったが、毎夕渡される、「症状や治療法もわかりやすく書かれているカルテを何度も読むと不安が減った」と話し、「『当たり前のこと』としてカルテが患者に渡るようになってほしい」と望むその母親の声が紹介されています。

その記事には、「患者さんや家族との情報共有は、医療の安全や質の向上という面でも大切なこと。患者さんの医療への積極的な参加にもつながる」という院長のコメントも掲載されています。

このような素晴らしい取り組みが、全国の医療機関に広がってほしいと願っています。